創立記念演奏会

春日井フィルハーモニーオーケストラ
KASUGAI PHILHARMONIC ORCHESTRA

・平成3年
1月13日(日)

PM1：00 開場
PM2：00 開演

春日井市総合体育館

◆主　催　春日井市交響楽団（春日井フィルハーモニーオーケストラ）
◆後　援　春日井市・春日井市教育委員会・春日井商工会議所
学校法人三浦学園・中日新聞社
◆協　力　ミュージックフォーエバー21・杉谷昭子ファンクラブ

ご　挨　拶

春日井市交響楽団会長
中部大学長　**山　田　和　夫**

春日井市交響楽団設立演奏会においでいただき有難うございます。

みなさまのご支援のお陰で、こんなにも立派にデビューを飾ることができました。

心からお礼申し上げます。

「オーケストラの成長は人間と同じ」といわれます。成人するまで20年―私たちは決して急ぎません。みなさまも、本日は生まれたばかりのみどり児の産声(うぶごえ)とお聴き下さいまして、春日井市初のオーケストラ誕生をお祝い下さいますようお願いいたします。

これからは、機会あるごとに、素晴らしい演奏をお聴かせ出来ますよう成長をつづけて参りたいと存じております。市民のオーケストラとして、なお一層のご支援をお願いいたします。

ご協演下さいますピアニストの杉谷昭子さん、ご後援・ご協力下さいました多くのみなさまに厚くお礼申し上げます。

では、新生・春日井フィルの響きをお聴き下さい。

ご　挨　拶

春日井市交響楽団名誉会長
春日井市長　**鈴　木　義　男**

本日、春日井フィルハーモニーオーケストラの創立記念演奏会が盛大に開催されますことを心からお祝い申し上げます。

本年度は、春日井市にとって永年の懸案でありました新市庁舎も竣工し、記念すべき年になりました。同じ年度に、春日井市交響楽団が結成されましたことは二重の喜びでありまして、私にとっても深い感慨を覚えます。

物より心が大切だといわれて久しい今日ですが、生の音楽とりわけ名曲に直接ふれることにより、さわやかな気分をとりもどし、雄大な演奏に感激を与え、豊かな心を育むものです。今、市民の皆さんから音楽文化の振興の気運が高まってきており、その先導的な役割を担う、春日井市交響楽団の結成はまことに機を得た有意義なことであり、今後のご活躍を大いに期待いたしております。

本日は、ピアニストとして国際的にご活躍されている杉谷昭子さんもご出演いただけるとのことですが、杉谷さんは〝彫刻の散歩道音楽会〟や〝中部大学キャンパスコンサート〟等で春日井には何度もお越しいただいている方であり、その杉谷さんの応援を受けて、オーケストラの皆さんも大変心強いことと思います。

今日の演奏会は、春日井フィルハーモニーオーケストラの歴史の幕開けでもあり、皆さんの素晴らしい演奏で、その第一歩を記念していただきたいと思います。

終わりに、春日井フィルハーモニーオーケストラの結成にお骨折りいただきました関係各位に心から敬意を表するとともに、春日井市交響楽団のご発展とご活躍を祈念申し上げまして、お祝いのことばといたします。

プログラム

交響曲第５番
―清流たちへの讃歌―

浜田一馬　作曲

指　揮　**浜　田　一　馬**

第１楽章　モデラート(中くらいの速さで)・序奏：変ホ長調・４／４拍子―アレグレット(やや速く)・ハ長調・３／４拍子。

第２楽章　アンダンテ(ほどよくゆっくり)・ト長調・４／４拍子。

第３楽章　モデラート・二長調・３／４拍子。

第４楽章　アンダンテ・変ホ長調・４／４拍子―モデラート―アレグレット・ハ長調・３／４拍子―コーダ。

休　憩

ピアノ協奏曲第３番
ハ短調 作品３７

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770－1827）作曲

ピアノ　**杉　谷　昭　子**
指　揮　**都　築　正　道**

第１楽章　アレグロ・コン・ブリオ(快速に、そして生き生きと)・ハ短調・２／２拍子。

第２楽章　ラルゴ(幅広く、ゆるやかに)・ホ長調・３／８拍子。

第３楽章　アレグロ(快速に)・ハ短調・２／４拍子―プレスト(急速に)・ハ長調・６／８拍子。

〔使用ピアノ　ベーゼンドルファー・インペリアル〕

曲目解説

都築　正道

交響曲 第５番
― 清流たちへの讃歌 ―

浜田一馬　作曲

昨年の９月、浜田一馬さんは大変な偉業をなしとげました。それは、自作の弦楽四重奏曲の四曲すべてを、第一番から第四番までずっと、一晩で連続演奏してみせたことです。演奏したのは、彼の音楽の最大の理解者であるナゴヤネオフィル弦楽四重奏団（北条道夫・高島耕二・北井寿美・加藤美香）。パブでのクラシック・ライブ演奏といった気楽な雰囲気でしたが、ソフトドリンクを口にする余裕もなく、２時間近い熱演に聴き入ったものでした。どの曲もハイドン初期の古典的なスタイルで統一されていて、「浜田さんはなんとも優雅な天国風食卓音楽を書いたものだ」と感心させられました。単純明解で庶民的で屈託のなさが、浜田さんの作品の価値です。そこに、音楽に対するエンシューシアズム（熱狂さ）を加えれば、まさに浜田さんの人柄そのものです。

その彼に、話題の『堀川』や『熱田の森』や昨年10月に初演された『信長』など、地元を題材にとった親しめる作品が多いのも十分に頷(うなづ)けます。どの作品も、スタイルといい、テーマといい、これまでの地元の作曲家たちが避けてきた手法でありジャンルです。多作を誇る浜田さんが、ポピュラリティーを持った名古屋自前の初のクラシック作曲家として貴重な存在であることはいうまでもありません。彼に、「名古屋国民楽派創立者」の称号を差し上げたいところです。

といっても、彼の音楽がすべてにおいて完成されたものであるわけではありません。パブリシティ（公共性）を損なわないために、複雑な転調やフーガを避けるあまり、ややもすれば表現が単調になることもあります。彼の円満な性格にはそぐわないでしょうが、ポリシィーを持って、文明批判を含むスケルツォ楽章を付け加えることも時には必要でしょう。その意味で、春日井フィルの常任指揮者として、彼の音楽活動が多彩になるに連れ、新たな音楽的展開が大いに期待されるところです。

さて、本日演奏されます彼の代表作の一つ、『交響曲第５番』―清流たちへの讃歌―は、昨年の春に完成され、浜田さんの主宰するナゴヤネオフィル管弦楽団によって初演されたものです。曲は、古典的な４楽章形式で、50分の大作です。

【楽器編成】　ピッコロ・フルート２・オーボエ２・クラリネット２・ファゴット２・ホルン４・トランペット２・トロンボン２・チューバ・ティンパニ・大太鼓・小太鼓・トライアングル・シンバル・ウィンドチャイム・ビブラートスラッパ・ハープ・弦楽５部

第１楽章　モデラート（中くらいの速さで）・序奏：変ホ長調・4／4拍子―アレグレット（やや速く）・ハ長調・3／4拍子。

第２楽章　アンダンテ（ほどよくゆっくり）・ト長調・4／4拍子。

第３楽章　モデラート・二長調・3／4拍子。

第４楽章　アンダンテ・変ホ長調・4／4拍子―モデラート―アレグレット・ハ長調・3／4拍子―コーダ。

ピアノ協奏曲 第３番
八短調　作品37

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770―1827）作曲

ベートーヴェンのピアノ協奏曲は、全部で何曲あるかご存知でしょうか。そうです、第１番から第５番『皇帝』まで、全部で５曲です。しかし、第１番の前に、彼が14歳のときにボンで書いた『変ホ長調』（Wo０４＝作品番号なしの４番）が1888年に発見されていますし、また、第１楽章の中頃まで書かれた『第６番』のスケッチも50頁ばかりあったそうですし、あの『ヴァイオリン協奏曲』を『ピアノ協奏曲』に編曲したのもありますから、正確には「７曲と1／6」ということになります。この「７曲と1／6」の中でも、最も有名なのは『皇帝』でしょうが、協奏曲という作品の完成度からいえば、本日お聴かせする『第３番』が最も優れたものといえましょう。この曲は、19世紀ロマン派の時代の幕開けを象徴するかのように、1803年（33歳）、ヴィーンのアン・デア・ヴィーン劇場でベートーヴェンのピアノ・ソロで初演され大成功をおさめました。

【楽器編成】　独奏ピアノと２管編成のオーケストラ（フルート２・オーボエ２・クラリネット２・ファゴット２・ホルン２・トランペット２・ティンパニ）弦楽５部（第１ヴァイオリン・第２ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロ・コントラバス）

第１楽章　アレグロ・コン・ブリオ（快速に、そして生き生きと）・ハ短調・2／2拍子。

典型的な「協奏曲風ソナタ形式」です。それは、美しい恋物語を聴くように、とても興味ある筋立てになっています。先ず、弦楽器がおどろおどろした第１主題（小説でいうと美男の主人公）を紹介します。管楽器も加わって、この主題を印象深いものに仕上げていきます。つづいて第２主題（美人の女主人公）も紹介されて、いよいよドラマが始まります。音楽では、ここまでを「主題呈示部」といいます。シーンと静まりかえった舞台に、楽器の女王ピアノが登場します。このドラマをおもしろおかしく語るのが、このピアノです。ピアノは、二人の主人公をくわしく紹介しなおします。これが、「主題の協奏風展開」です。そして色々な話し方で、二人の主人公が出会う恐ろしい事件や愉快な出来事についてお話します。オーケストラは、ピアノのお話に連れて、物語の背景や主人公の気持ちや世間の反応などを演奏します。これが、「展開部」です。激しい旅を終えて、再び、成長した二人の主人公が故郷に戻ってきます。これが、「再現部」です。最後の締め括りとして、ピアニストが一人で堂々と「口上」を述べます。これが、「カデンツ」（即興演奏）です。もともとは、腕自慢のピアニストが、その場で思い付いたように、自由な発想で、あらんかぎりの技術を発揮してソロを奏く得意のシーンなのですが、今日ではベートーヴェン自身が書いた楽譜を弾くことになっています。それは、63小節もある長いものです。オーケストラ全員でピアニストの腕前を称えて、この楽章を終わります。

第２楽章　ラルゴ（幅広く、ゆるやかに）・ホ長調・3／8拍子。

ピアノがゆっくりと、独り言をいうように、優雅なメロディを弾き始めます。これが〔主題Ａ〕です。そして、今度は第１ヴァイオリンが、良く歌うリズミカルな〔主題Ｂ〕を弾きます。ピアノの美しい分散和音（アルペジオ）が加わって、また、〔主題Ａ〕が再び戻ってきて静かにこの楽章を終わります。構成が、〔Ａ―Ｂ―Ａ〕になっているので、「三部形式」といわれています。

こういった曲には珍しく、オーボエとクラリネットとトランペットとティンパニがお休みしています。そのために、平和で落ち着いた気分が全体に強く漲(みなぎ)っています。

第３楽章　アレグロ（快速に）・八短調・2／4拍子―プレスト（急速に）・八長調・6／8拍子。

突然、速い楽章に変わります。歯切れの良い２拍子の主題が、相手（色々な主題）を代えながら輪を描いて輪舞（ロンド）を踊るようになんども現れます。「ロンド形式」です。ピアノとオーケストラのかけ合いが楽しく愉快に繰り返されます。最後は、目が回るほど速く踊って、明るく華やかに終わります。エネルギーと自信に満ちた力強い終曲です。私たちは、この協奏曲を聴くとき、人生を力強く生きるための勇気と信念と希望を与えられたような気がします。